

Y10c 和歌山・大阪での新しい実践 -釜ヶ崎、商店街、保育園、ホスピス-

富田晃彦、尾久土正己、中串孝志、佐藤奈穂子、横山正樹（和歌山大学）

和歌山大学の宇宙教育のグループが、2009-2010年に和歌山や大阪で行った新しい天文教育普及活動のいくつかを紹介する。その上で、「三角形構造」の中、から「蜘蛛の巣構造」の中、へ、また「QOL向上」という視点について、当日議論を深めたい。

釜ヶ崎は、日本最大といわれる日雇労働者の就労する場所である。釜ヶ崎で活動するNPO法人と尾久土が協力し、観望会などの活動が始まった。参加者からの声：「俺は嬉しいよ、みんなこんなに喜んで、それからみんな順番に並んで、ひとりひとり楽しんで、首が痛くなっても、みんなで上を見てね。宇宙はいいね。ここにいる奴、みんないい奴だよ。ここはいいとこだよ。」我々が宇宙を見せに行ったのではなく、三角公園に誘われて、我々の知らない時空間を見せてもらったのであった。こちらから何かを与える、ではなく、お互いがお互いから得るという関係を目指すのは、現地のNPOの方々の目標でもある。大阪や和歌山の商店街で開かれたサイエンスカフェの後、参加下さった音楽家の方は、主催する音楽の例会で「科学は信用できるものなのか」という議論をし、その例会活動は、保育園での音楽会にまで発展した。以前によく見られた「科学研究者を支える三角形の構造で、頂点を高くするため、また頂点を維持するために、裾野を広く、また裾野を維持する」というものではなく、お互いがお互いを刺激し合う「蜘蛛の巣構造」の中のサイエンスカフェであれば、予想のつかない発展を呼び込むものになると考えている。尾久土は、末期がんの患者さんに「星の死と誕生」についてベッドの横に座って話をする機会を持った。宇宙を見ること・宇宙を知ること、誰のためでもなく、ひとりひとりの生活の質(QOL)の向上につながる、という考えを強める経験であった。